へいわをつなぐ

▷上

京都空襲もいまや風化

年々、亡くなる体験者

京都発21世紀　第4部

薄れゆく記憶

一九四五年一月十六日深夜。大寒を控え、京都市内は凍てつくような寒さだった。

午後十時半ごろ、震度3の地震が古都を揺らした。三日前に愛知県南部を襲い、約二千三百人の犠牲者を出した三河地震の余震だった。ほっとしたのもつかの間、ほどなく、一機の米軍爆撃機B29が上空に飛来した。現在の東山区馬町周辺に、焼夷弾や小型爆弾計二百個以上を投下した。京都市民は初めて、空襲を目の当たりにした。

地元の修道国民学校四年生だった山村義明さん(六四)は「キーン」という甲高い音で、目を覚ました。二階で両親兄弟の六人で寝ていた。「外へ出ろ」というどなり声が聞こえた。寝間着のまま裸足で戸外へ飛び出した。

爆風で階段の下半分が吹き飛ばされていたが、どうやって外へ出たのか記憶がない。暗やみの中に火事の明かりが浮かび上がっていた。警防団が消火作業をしているホースの水が、石畳の上で凍り始めた。「覚えているのは、とにかく寒かったということ」

夜が明けてみると、近所の家は柱だけを残して屋根がなくなっていた。学校の講堂の床に手や足のない遺体が並べられていた。治療に使ったのか、保健室のベッドは血まみれだった。姉の同級生が爆撃の犠牲になったと知らされた。

「おふろに行っていなかったら無事だったかどうか」

酒屋を営む今西寿美さん(八四)は空襲の時、歩いて三十分ほどの銭湯から帰る途中だった。突然ガタガタと揺れたが、「また地震か」とあまり驚かなかった。家に帰ってみると、ガラス戸が割れ、商売ものの一升瓶は割れて散乱。天井近くの壁に直径約四十㌢の穴があいていた。

近所の人が担架で次々と運ばれて行く。呆然としている今西さんの耳に、サイレンの音が聞こえてきた。「空襲だ」。初めて気づいた。片づけを放り出して、頭から布団を被り、朝まで震えていた。

今西寿美さんの家のタンスに残る長さ15㌢の傷は空襲の記憶をよみがえらせる＝東山区下馬町で

「京都市に爆撃があって人が死ぬなんて想像もしてなかった」

1945年1月16日夜の空襲で破壊された下馬町の民家＝故長谷川哲也さん撮影／写真提供・宮川友治さん

爆撃が集中したのは、三十三間堂の北東、東山区上馬町から下馬町周辺。渋谷通沿いの東西約三百㍍、幅約百㍍の地域だ。死者は渋谷通の南側に集中した。

空襲直後の一月十八日付の新聞を見ると、京都市の一部がB29の爆撃を受けたことは伝えているが、「被害は軽かった」とし、詳しい場所を記していない。また、現場にみだりに立ち入ったり、被害を誇大に伝えたり、現場の写真を撮ったりすると罰せられる、とも記事に書かれている。

修道小学校の近くに住む徳田清さん(八六)は「うろうろしたらいかん。いらんことを言ったらすぐに憲兵に引っ張られるぞ」と、父親からきつく言われたことを覚えている。

空襲があったことは、ほとんど伝えられないまま終戦を迎えた。「京都は空襲を免れた」。世間でそう言われ続けた。

終戦から約三十年たった七四年、京都の空襲を調査した「かくされていた空襲」(汐文社刊、約二百五十㌻)が出版された。仏教やキリスト教の若手の聖職者や被災者らでつくる「京都空襲を記録する会」などがまとめ、刊行した。

空襲の被災者の証言、被害の写真、亡くなった人の氏名などが掲載され、初めて京都府内の爆撃の実態と全容が明らかになった。

それによると、馬町周辺の空襲で亡くなった人は四十一人、けがをした人は四十八人。同年六月二十六日には上京区の西陣地区で規模な空襲があり、五十人が亡くなった。西陣空襲も当初は「被害は軽微」「爆撃のうちに入らない」と報道されていた。

馬町周辺と西陣地区のほか、奏地区なども散発的に空襲を受けている。終戦までに京都市内だけでも爆撃で約九十人の命が奪われ、約四百人が負傷した。府内全体の空襲による死者は少なくとも約三百人、負傷者は同じく約五百六十人にのぼると見られる。

「市内各地につめ跡が残るわけでもなく、学校全体として踏み込んで取り組むのは難しいのではないですか」。京都市教委学校指導課の職員は話す。小学校や中学校の社会科で戦争について学ぶが、都の空襲を掘り下げることはしない。修道小学校など地元の小中学校でも事情は同じだ。

「記録する会」などにより空襲の実態が明らかになってから四半世紀。爆撃の被害者の慰霊祭は遺族が減り、八〇年代前半から催されなくなった。

京都に空襲があったことを身をもって体験し、語り継ぐ人は、年々亡くなっていく。修道自治連合会長も務める山村さんは、やるせない。

「地元でも空襲は風化しようとしている」

◇　◇

終戦から五十四年。戦禍の記憶を来世紀にどう語り継ぎ、残していくか。風化を止め、歴史を掘り起こそうとする人々を取り上げる。